

特集

状況をシビアに判断し、苦渋の選択をした福島の農業経営者たちの声を聞こう

平成23年12月15日発行 毎月1回1日発行 No.189 平成11年3月8日 第3種郵便物認可 ISSN 1881-4727

# 農業経営者

耕しつづける人へ

FARMERS' BUSINESS

2011 December

12

No.189

特集

リスク回避と経営発展のための新天地を探す

続

## 農場“分散・移転”

### の ススメ

新・農業経営者ルポ

大分の大地に足をつけ  
日本を変革する国土。

(株)西日本農業社 (株)コディコロ 代表取締役社長 後藤慎太郎

Twitter: @FarmbizEditor

<http://www.farm-biz.co.jp>













# 大分の大地に足をつけ 日本を変革する国土。



16 企業組合「グループ恵」とタッグを組み、臼杵市内に加工場併設型の直売所「めぐみ工房」を3年前にオープン。周辺農家から持ち込まれた農産物を西日本農業社が集荷し、この店に運んでくる。地元の食文化を守り続けたいという思いもあり、昔ながらの漬物を加工場で作るという。16 後藤家の面々。左から妻・小春、長女・梨花、父であり西日本農業社会長も務める益喜、母・澄子。



「カー大手として知られる、矢崎総業(株)グループとの出逢いである。」

同社グループは、日本国内に多くの支社、関連会社、工場を有している。地域社会に密着した経営を信条としてきたが、生産拠点が海外へシフトされてゆく流れの中で、母体が磐石なうちに新事業を立ち上げ、行き場を失いつつある従業員たちの雇用先を確保しようと動き始めている。そのひとつとして農業分野の進出に乗り出そうとしており、ビジネスパートナーとしての農業経営者を採す過程の中で、後藤と巡り逢った。

同社グループ、善岡和男・大分部品株副社長が言う。

「西日本農業社は平均年齢35歳前後の若い集団で、耕作放棄地を積極的に借りて取り組んでいる。その姿勢に打たれて一緒に生産に関わり、収穫したものを工場に持ち込んで、我われのチャンネルを通じて販売のお手伝いができるのではないかと思いました。こうした形であれば地域にも貢献できるし、若者だけでなく高齢者にも雇用を広げられる。こういう取り組みを始めたのは、グループ会社の中でも当社が初めてであり、本社からも期待されています」

現在、大分部品は西日本農業社が準備したベビリーフのハウスを2棟借り受け、社員を派遣している。

後藤はあくまで栽培指導しているにすぎない。そのため、現段階で資本関係があるわけではないが、将来的には、共同出資で別会社を設立する可能性も秘めている。

「企業側に呑み込まれる——」。これこそが、企業と対峙した時に振りが、後藤の描く理想は、そんなヘリクツを笑い飛ばしてしまおう。

「矢崎総業さんの傘下に入ってもいいというぐらいの気持ちでやってます。この国をなんとかするという原点に立ち返れば、小さなことにこだわっている猶予はありませんよ。九州には大分県だけじゃないんですが、いずれは農協出資の農業法人になってもいいと思っています。パブリックな存在になって、オールニッポンで農地を守ろうということ。これからの農業は公共事業です」

彼の眼差しには、一点の曇りもない。そして、こう続けた。

「農業をやっていないかったら、これだけ多くの人たちと出逢えませんでした。こんなに海外へ行ける機会もなかったはずですよ。まるで人生、旅をしているような感覚です。最終的には、志を同じくする人と一緒に天竺へ行きたいですね」

彼は、やはり変人だった。

(文中敬称略)